

華夏石刻博物館蔵北魏石床（二面）について

黒田 彰

〔抄録〕

華夏石刻博物館には、これまで紹介されなかったことのない、貴重な北魏石床が二組（内、一組は二面のみ存）、所蔵されている。この度、呉強華氏の紹介により、その所蔵者張宝祥氏から二組の北魏石床の調査及び、撮影の許可を得ることが出来た。小稿は、その二組の内、二面の石床囲屏の原石写真を、初めて紹介すると共に、右側板左に描かれた、孝子伝図の董永図について、その研究史的な意義を論じようとするものである。董永図は、これまで二十四遺品の現存が確認されているが、中でも本図のそれは、際

だった特徴を持っている。それは、董永とその父以外、一切の余分な人物を描き加えないことである。董永図には、西野貞治氏による「董永伝説について」（昭和30年）依頼の長い研究史があり、小稿は、新資料である本図の特徴から、その西野説の再評価を試みる。

キーワード 華夏石刻博物館蔵北魏石床、孝子伝図、董永図、武

梁祠、西野貞治

一

華夏石刻博物館には現在、二組の北魏石床が所蔵されている。いずれも未紹介の、非常に貴重な遺品であるが、二〇一八年三月にそれらを実見、調査し得た経緯については、本誌別稿「華夏石刻博物館蔵北

魏石床について―第三の臨深石床の出現―」に記したので、ここでは繰り返さない。その別稿で取り上げたのは、二組の石床の内、右側板に臨深図を含む、四面の囲屏と二石闕、前脚から成る北魏石床（臨深石床）であった。そして、小稿で取り上げるのは、残る一組―二面の囲屏と前脚から成る北魏石床（孝子伝図の董永図を含むので、董

永石床と仮称する）の方である。図版一、図版二として掲げたのは、本石床の二面の囲屏の原石写真である。^①まず本石床の法量を示せば、次の通りである。

正面左板——縦四八・〇糎、横九四・二糎、厚六・七糎

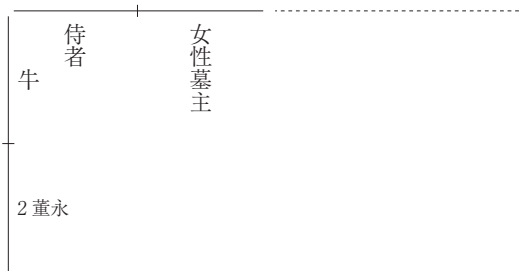
左側板——縦四七・六、横一二三・二、厚七・五

前脚部——高二七・五、横二〇八・七、厚一六・二

参考までに、図一として本石床前脚の原石写真を掲げておく。^②本石床は、一面の囲屏を二区画に切っている。そして現存する二面の囲屏には、それぞれに女性墓主と牛車とが描かれているので、それらは正面左板、左側板に当たるものと認定され、従って、本石床は、正面右板及び、右側板の二面を失っていることが知られよう。図二は、本石床の二面の囲屏内容を、概念図化して示したものである。本石床には孝子伝図が一図含まれている。それが左側板の左に描かれた、2董永図である（2は、陽明本孝子伝による目録番号〈船橋本も同じ〉）。図二の画像配置から見て、現在失われている、本石床の正面右板左には男性墓主、右側板左には馬、その右には2董永図と対になる、やはり孝子伝図が描かれていたものと考えられる。北魏時代の石床囲屏に描かれる、孝子伝図の配置順序について、かつて林聖智氏は、それらが陽明本孝子伝の目録順に従い、まず右の外側から中心（男性墓主像）へ向かって配置され、次に左の外側から中心（女性墓主像）^③に向かって配置されるといふ、極めて重要な原則を明らかにされている。すると、失われた右側板右に描かれていた孝子伝図というものは、左側板左のそれ、即ち、2董永図に先立ち、陽明本孝子伝目録2董永より、若い



図一 前脚



図二 本石床の内容

番号を持つていなければならぬから、それは、1舜以外にはあり得ないことになる。このことから、本石床の失われた右側板右には、舜図の描かれていた可能性が極めて高いのである。

二

本石床（二面）には、孝子伝図が一図、含まれている。左側板左に描かれる董永図である。図三は、その董永図を掲げたものである。董永図に基づいたと思われる、陽明本孝子伝2董永条の本文を示せば、次の通りである。

楚人董永至孝也。少失母、独与父居。貧窮困苦、傭賃供養其父。常以鹿車載父、自隨着陰涼樹下。一鋤一廻、顧望父顔色。供養蒸々、夙夜不懈。父後寿終、无錢不葬送。乃詣主人、自売為奴、取錢十千。葬送礼已畢。還売主家、道逢一女人。求為永妻。永問之曰、何所能為。女答曰、吾一日能織絹十疋。於是、共到売主家。十日便得織絹十疋。用之自贖。々畢、共辞主人去。女出門語永曰、吾是天神之女。感子至孝、助還売身。不得久為君妻也。便隱不見。故孝経曰、孝悌之志、通於神明。此之謂也。賛曰、董永至孝、売身葬父。事畢无錢、天神妻女。織絹還売、不得久処。至孝通靈、信哉斯語也

本図には題記があつて、

董永看父助時

と記すが、助は、鋤の音通による宛字である。さて、本図は、例えば



図三 董永図

陽明本の本文に、

常以鹿車載父、自隨着陰涼樹下。一鋤一廻、顧望父顔色。供養蒸々、夙夜不懈

とある場面を描いたものである。画面左に、一本の木（銀杏）の下で席に坐す、董永の父が描かれている（右向き。本文に言う、鹿車は描かれていない）。その父は、両掌を上へ向け、何かを訴えているようである。画面右には、上へ向けた鋤を左手に握り、父の方を振り返る、立った姿の董永が描かれている（右向き）。画面中央の上に描かれた太陽は丁度、正午を示す如くである。父の右には二、三の食器類も描き添えられているが、総じて本図は、極めて簡単な構図による、董永図である点が、特徴として指摘できよう。

孝子伝図としての董永図は、漢代以来とても人気の高かったものの一つで、遺品の数も非常に多い。管見に入った董永図は目下、本石床を含めて、以下の二十五点を数える。

- (1) 後漢武氏祠画像石（武梁祠）
- (2) 和林格爾後漢壁画画墓
- (3) 泰安大汶口後漢画像石墓
- (4) 中岳漢三闕啓母西闕
- (5) 渠県蒲家湾無名闕
- (6) 樂山柿子湾Ⅰ区Ⅰ号墓
- (7) 渠県蒲家湾無名闕
- (8) 江蘇徐州仏山画像石墓
- (9) ネルソン・アトキンズ美術館藏北魏石棺

(10) ポストン美術館藏北魏石室

(11) C.T.100 旧藏北魏石床（現ポストン美術館蔵）

(12) ネルソン・アトキンズ美術館藏北齊石床

(13) 陝西歴史博物館藏三彩四孝塔式缶

(14) 大象陶器博物館藏三彩四孝塔式缶

(15) 望野博物館藏三彩四孝塔式缶

(16) 樂山麻浩Ⅰ区Ⅰ号墓

(17) 樂山麻浩Ⅱ区40号墓

(18) 樂山麻浩Ⅱ区22号墓

(19) 濟南長清大街1号墓

(20) ポストン美術館藏後漢董永画像鏡

(21) 臨沂呉白莊後漢画像石墓

(22) ヴァージニア美術館藏北魏石床

(23) 呉氏藏翟門生石床

(24) 呉氏藏董黯石床 B

(25) 華夏石刻博物館藏北魏石床（二面）

(1)―(8)、及び、(16)―(21)の十四点が後漢時代、(9)―(12)、及び、(22)―(25)の八点が北魏時代（東魏、北齊を含む）、そして、(13)―(15)の三点が唐代の董永図である。⁵⁾ 紙幅の関係上、二十五点の全てを掲出することは出来ないが、中で、近時目睹した、幾つかの董永図を紹介しておきたい。ここで取り上げるのは、(20)―(24)の五点の董永図である。

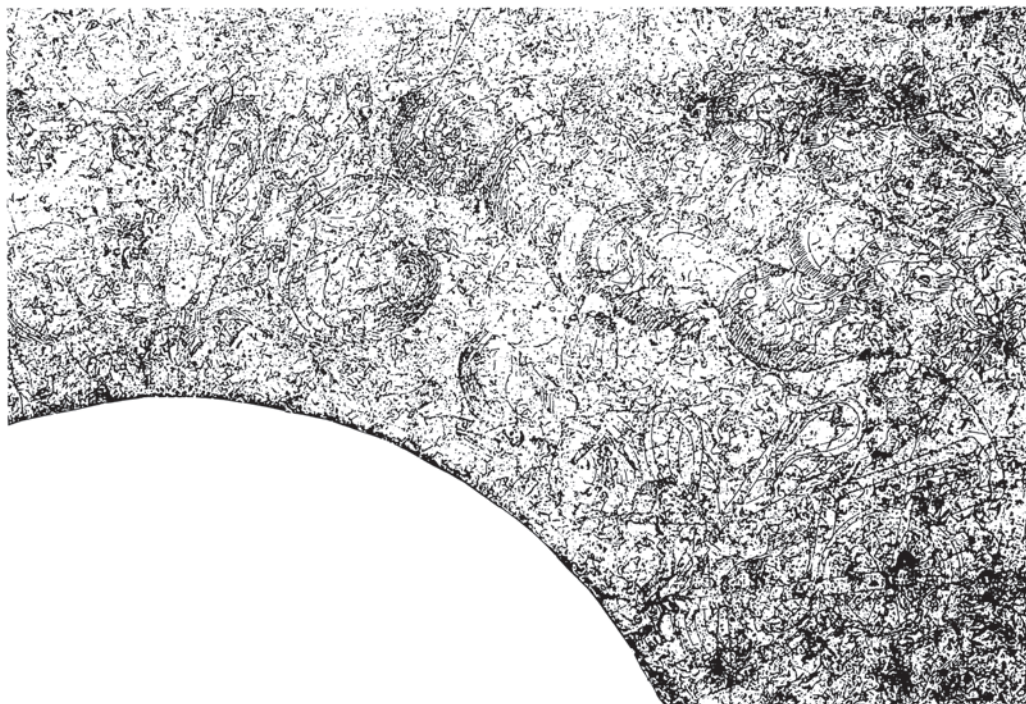
図四は、(20)ポストン美術館藏後漢董永画像鏡（仮称）に描かれた董永図を示したものである。⁶⁾ 当図は、檀山満照氏が始めて紹介されたも



図四 ⑳ボストン美術館蔵後漢董永画像鏡

ので、⁽⁷⁾ 楢山氏によれば、当「鏡は、その製作地を一世紀後半頃の長江中流域の楚地におおよそ求めることができる」(54頁)とされるから、現存最古の董永図(また、孝子伝図)ということになる。銅鏡に描かれた孝子伝図としても、極めて珍しく貴重なものとすべく、管見に入った遺品としては、村上英二氏旧蔵(現根津美術館蔵)孝子伝図画像鏡に次ぐ、二例目の遺品である。⁽⁸⁾ (当該鏡に描かれるのは、曾參、閔子騫の二図である)。当図は、画面左に、一輪車(鹿車)に腰掛ける董永の父(右向き)、右に、耕作する董永(同)を描いている。父は、右手に持った鳩杖を右の肩に当て、顔を正面に向けている。その父を頭上から覆うのが、画面の左端に描かれた一本の木で、根元に置かれるのは、水を容れた用器であろう。一方の董永は、左手にした鋤を斜め下へと構え、父の方を振り返っている。当図を見ると、例えば本石床の董永図(図三)と殆ど同じ構図を持っているから、それ(図三)が漢代の董永図の図柄を、よく保持していることが知られるのである。

図五として掲げるのは、臨沂市博物館蔵の臨沂吳白莊後漢画像石墓前室東過梁西面に描かれた董永図である。⁽⁹⁾ 画面右から左上へ上部を覆う大樹の下に、両手で握った鳩杖を、左の肩に当てる、董永の父が描かれている(左向き)。父の左上、枝から提がるのは、父の昼食を容れた籠であろう。画面右には、両手に持った鋤で左下の地面を耕す、董永が描かれている(左向き)。その董永は、やはり父の方(右)を振り返っている。当図の特徴は、冠を被った董永の両袖や、父のそのれが大きく宙を舞う点で、同様の描写は、例えば沂南北寨後漢墓中室の



図五 (2)臨沂吳白莊後漢画像石墓(董永)

列土図中などにも見ることが出来る。当図は、図三や図四の左右を入れ替えた形の董永図となっているが、基本的な構図は、両図とも変わらないが、

図六は、ヴァージニア美術館藏北魏石床、正面石板中央に描かれた董永図を示したものである(題記「此是董永看父助時」^⑧)。題記の右側に、ほぼ画面の下から上まで生えた、大きな銀杏の木が立っていて、その右方の木陰に、台車(三輪車か)に坐した、董永の父が描かれている(左向き)。父は、右手にT字の杖を持ち、人差指と中指を上げ(左手も持ち上げている)、微笑み乍ら董永に話し掛ける如くである。左の根元には、取手のある壺や椀も見える。画面左には、鋤を両手に握って斜め右下の地面に突き、やはり父の方(右)を振り返る、董永が描かれている(左向き)。当図は、本図(図三)と、題記が共通することに加え(宛字まで同じである)、左右こそ反転しているものの、殆ど同じ図柄を持っていることが分かる。

最近知られるに到った残る二遺品、^{②③}と^{②④}も同様に、本図(図三)以下と、とてもよく似た董永図が描かれている。便宜的にそれらの両図を、図七、図八として併せ掲げよう。図七は、^{②③}吳氏藏翟門生石床の左側板右に描かれた董永図(題記「董永看父助与食時」^⑨)、図八は、同じく^{②④}吳氏藏董黯石床Bの右側板左に描かれた董永図を、それぞれ示したものである。^①図七の題記も、本図(図三)や図五のそれに似るが、傍線部「与食」という二字の加わっている点が特異である。^⑩両図は、画面左に、三輪車に坐した、董永の父を描く(右向き)。左の袖を上げ、右手で杖を突く、両図の父の仕草は、全く同じである。また、



図七 23呉氏蔵翟門生石床(董永)



図六 22ヴァージニア美術館蔵北魏石床(董永)

画面右に、右手に鋤を握り、左手を胸の辺りへ上げる、董永が描かれていることも同じである(但し、図七では、董永が鋤を右肩に当て、図八では、鋤の柄を地面に突いている)。さらに画面の左の木が、父の上を覆うことも同じである。注目すべきは、両図の董永が始めから左向きに描かれ、父を振り返る形にはなっていないことであろう(このような姿形の董永も、漢代の四川の董永図(5)(6)(7)など)でよく見掛ける)。一方、両図の相違点としては、例えば、図八の、父と董永との間に置かれた、壺やその他の食器類が、図七には見当たらず、図七では、画面右端の女性(左向き)が右肩で棒に下げた、水瓶らしきものへと変わっているなどの点も上げられようが、図七、図八両図の



図八 24呉氏蔵董黯石床B(董永)

最大の相違点と見るべきは、図八（及び、上掲図三以下の董永図）には、全く描かれていない上述、画面右端に立つ女性と、父の左に立つ、双髻の子供とが、図七には描き加えられることである。実は、董永図において、例えば図七に典型として見られるような、父と董永本人以外に付加された人物が、これまでの董永図研究、また、董永物語研究に大きな影を落としているのである。この機会に、その問題について、少し触れておくこととしよう。

三

西野貞治氏に「董永伝説について」と題された労作がある⁽¹³⁾。ここで取り上げるのは、その西野論文の董永図をめぐる捉え方である。一方、西野氏には「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」と題する名論文もあって、当論攷は、近代における孝子伝研究及び、孝子伝図研究を基礎付け、その方向を決定付けられた画期的なもので、西野氏の名前は研究史上、不朽のものとして決して忘れられることはないだろう。当論攷が書かれたのは、昭和三十一（一九五六）年のことであり、「董永伝説について」の方は、前年の昭和三十（一九五五）年に書かれているから、こちらは、当論攷の準備作業としての、意義を持つ試論の如く思われる。その「董永伝説について」はまず、「董永伝説のうち最もよく知られるものに搜神記に見える次の一条の説話がある」（67頁）と書出され、その口語訳を掲げた後、武梁祠の董永図などの考証へ進まれるので、ここで晋、干宝撰二十卷本搜神記一28

の本文を確認してから、西野論文を引用することとしよう。

漢董永、千乘人。少偏孤。与父居、肆力田畝、鹿車載自随。父亡、無以葬、乃自売為奴、以供喪事。主人知其賢、与錢一万、遣之。永行三年喪畢、欲還主人供其奴職。道逢一婦人、曰、願為子妻。

遂与之俱。主人謂永曰、以錢与君矣。永曰、蒙君之惠、父喪收蔵。永雖小人、必欲服勤致力、以報厚德。主曰、婦人何能。永曰、能

織。主曰、必爾者、但令君婦為我織纈百疋。於是永妻為主人家織、十日而畢。女出門、謂永曰、我天之織女也。縁君至孝、天帝令我

助君償債耳。語畢、凌空而去、不知所在

右の搜神記本文に関して注意すべきは、西野氏も、「この説話は法苑珠林四九には劉向孝子伝の、太平御覽四一一には劉向孝子図の引用として見え、話は殆んど同一であり、或は搜神記が劉向孝子伝（図）の説話をそのまま引いたかと推測される」（68頁）と留意されたように、それは、六朝時代の仮託と言われる、劉向孝子伝（図）を引いたものと、見做すべき本文に外ならないことである。即ち、例えば後漢時代に制作された武梁祠の董永図（後掲図九）の解釈に、仮託の劉向孝子図（伝）を用いることは通常、不適とすべき問題が、そもそもそこには横たわっている。西野氏が考証の対象とされたのは、上掲(1)―(25)における(1)、(9)、(10)の三点の董永図であるが、氏は、その三図の掲出を省かれているため、その論点を具体的に把握することが難しくなっている。そこで、論文の引用に先立って、その三図を示しておく。図九は、(1)武梁祠三石（右から三番）に描かれた董永図、図十は、(10)ボストン美術館藏北魏石室右側上段に、図十一は、(9)ネルソン・アトキン



図九 (1)武梁祠画像石(董永)



図十 (10)ボストン美術館蔵北魏石室(董永)



図十一 (9)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺(董永)

ズ美術館藏北魏石棺左幫右に、それぞれ描かれた董永図を掲げたものである。⁽¹⁶⁾

さて、西野氏は清、瞿中溶の『漢武梁祠画像攷』（道元五（一八二五）年序）五に記された、図九の考証の口語訳を掲げた後、図九以下の三図について、次の如く論じられた。

この構図は孝子伝の、董永が父を鹿車にのせて田に伴ひ孝養を尽す様子を示すもので、董永が竹筒の蓋をとる姿勢をしてゐるのは、蓋しその竹筒は絹布を入れる器であり、織つた縑が予定量に達した事を示すもので、上に飛行の一人こそ、その任務を終へてまさに天上にかへらんとする天の織女を示すものであり、時間的に前後の關係にある二の場面を一図にまとめて構図したものであらうと仮定しよう。瞿^(中)仲溶が四足有尾の獸が董永の左上の空処にあるのを点綴されたもの、即ち構図を引立てる為のもので説話に何等役割を持たぬものと見たのは正しい。武梁祠の画像石では獸や鳥が図の空処をうめて構図を引立ててゐる例は他にも見られる。しかし樹の右に一小児の援援して上らんと欲するものは一体何を示すのか。孝子伝に記載されなかつた伝承で、或はこの小説に關するものもあるのではなからうかといふ疑問が生ずる。魏の曹植の靈芝篇（宋書卷二十二樂志四に引かれる）に見える「董永は家の貧しきに遭ひ、父老ひて財の遺れるなく、挙て仮りて以て養に供へ、傭はれ作つて甘肥を致せり、責家は門を填めて至るも、知らず何を以て帰さんかは、天靈徳の至れるに感じて、神女為めに機を^乘り」といふ一筋からは孝子伝に見える説話とかなり趣の異つた

伝説があつたことが想像される。傭作とは漢書匡衡伝の王先謙の補注によれば庸保となつて雑作すること、言ひかえれば小作人である。又責家の責は債に通ずる。即ち父に孝養をつくす為に人からいろいろな融通を受けたが、やがてその督促に耐へ切れず困惑してゐたところ、天帝が彼の孝徳に感じられて、神女を下し機を織らせて彼の負債償却をたすけたといふのであつて、孝子伝に見えた父の葬を行ふために身を奴に売つたといふ表現は全く見られない……小説の文と異つて叙情を主とする詩では、叙情のピークと見られる所のみを詠んだと考へられぬこともないではない。然しながら、このやうな異つた伝承の存在を裏付ける資料がボストン美術館の北魏画像石の「董永看父助時」と題された画像に見出される。その構図は左右二部に分け、右図は田に出て働く男女、右に董永左にその仕事を助ける、おそらく天の織女が描かれ、二人共に農具を手にして相語る貌の如くである。そして、女は董永と異つて袖の長い衣を着て、頭には口をかがげて両翅をのべた帽所謂「鳳度三橋」（南齊書五行志、南史齊本記に見える）の帽を冠つてゐる。左の図は、仕事を終り父を載せた鹿車を董永が曳いて家に帰る図であるが、その車の横には右図に見えた女が、華蓋を捧げて父にきせかけてゐる。その若い女なることは大きな双髻から察せられる。双髻は男の幼児並に年若き婦女にのみ見られる髪型であつた。これは董永が父をいたはりつつ農耕にはげむ所へ、女が現れて求婚し、共に家に帰る伝承を表すものである。なおこの画像の外にも、同じく米国のカンサスシティのネルソン

美術館の北魏の石棺に見える「□子董永」と題する画像がある。

これも左右二部からなり、左は董永が鹿車をとどめて父をやすませ仕事にかからうとする所を描き、右はその仕事の場に天女が降つて求婚する図の如くである。これでは天女を表す為、女は後にひらひらとたびく領布を着け、足の部分が見えず、又織女を示す織機の一部に見られる軸状器具を手にしてゐる。この二人相対する姿勢を、先のポストン美術館の画像に比すれば、更に象徴的であり、またそれを補ひ得ると思ふ。この二の画像から、又特にポストン美術館のそれは、「父を^{タヤ}見て助す時」との題記からも、董永の父の生存中に天の織女が天降つてその孝をたすけた事を意味するに違ない。かく見れば、武梁祠画像石について、説話の時間的に前後の関係にある二の場面を一図にまとめて構図したといふ先の仮定は改めねばならぬ。靈芝篇の作者曹植は武梁祠石室成立とは左程はなれた時期の人ではないことからこの見方がより自然である。中国古代に於いて祖先祭祀の鄭重なりしことは礼記の諸篇に委しく伺はれる。畢竟それは家族制度を鞏固に維持せんが為のものである。その具体的実行基準として孝道の徳目が掲げられ、漢の武帝が儒教を国教として定立して以来、孝道が殊に宣揚せられた。孝経もかかる社会的背景の下に西漢の末期から強調されたものと考へられる。この社会的風潮は漢魏六朝に亘つて盛であつたが、その間に童蒙の訓育と庶民の教化に資する目的をもつて編纂された孝子伝の説話が、在来の素樸な伝説にかなりの誇張や補填があつても不思議はない。董永の説話にして

も、元來は靈芝篇に詠まれたように、董永が父に孝養をつくす為に起きた借財の為に困苦してゐたところ、天から織女が降つて機織によつて借財償却を助けたといふ伝説があつたものを、その孝行を誇張する為に織女下降の原因として父の歿後葬式の費用に困つて身を奴に売つてその葬式を終へたといふ孝行実施に伴ふ困難さを誇張し補填したものと思はれる。そしてこの誇張し補填された伝承と元來の伝承との二の伝承がある時期には並んで伝はつたが、やがて元の型のものが失はれたものと思ふ(68—71頁)

先に述べた通り、西野論文は昭和三十(一九五五)年のもので、当時知られた董永図は、確かに(1)、(9)、(10)の纒か三図に過ぎなかつたことを踏まえた上で、それを讀む必要がある。西野説でまず問題とすべきは、図九の画面左、董永が右手に持つもの、及び、その下の四角い図像について、「董永が竹筒の蓋をとる姿勢をしてゐるのは、蓋しその竹筒は絹布を入れる器であり、織つた縑が予定量に達した事を示すもので」(69頁)とされる点である。それは、瞿中溶の、董永の「其前左地上、有一器、如竹筒」を受ける説だが、誤りとすべきである。董永が竹筒の蓋を手取るような、董永図というものは目下、一図も存在せず、董永が手にするのは、決まって鋤だからである。図九のそれも鋤の一種と見るべく、竹筒(竹筍)とされたのは、木の切株であるうと思われる。それが問題なのは、西野氏が続けて図九、董永の右上の飛人(飛天)を差して、「上に飛行の一人こそ、その任務を終へてまさに天上にかへらんとする天の織女を示すものであり、時間的に前後の関係にある二の場面を一図にまとめて構図したものであらうと仮

定しよう」（69頁）との、仮説へと進むための、それ（絹の入った竹筒）が前提とされているためである。氏のその仮定とは、画面上の飛人を董永の妻となった織女と見、図九を言わば異時同図と捉える説だが、結論を先に言えば、それも誤りである。図九の飛人は、その左の飛獣と同様、図像の基づく物語とは無関係の、画象上の修飾物と考えるべきである。このことは、後でまた触れるが、問題が深刻なのは、言わば西野氏の仮定が武梁祠画象の研究史的に、まず近代の容庚氏へ受容され（『漢武梁祠画象録』「漢武梁祠画像考釈」六（21丁裏）、さらに現在の長廣敏雄氏へと継承されているからである（同氏編『漢代画像の研究』二部「武梁石室画像の図象学的研究」24董永（80頁））。さらに西野氏は、武梁祠の董永図に關しもう一点、極めて重要な問題を提起されている。それが、「しかし樹の右に一小児の援援して上らんと欲するものは一体何を示すのか。孝子伝に記載されなかつた伝承で、或はこの小説に關するものもあるのではなからうかといふ疑問が生ずる」（69頁）という、図九右端に見える、木に片足を掛けた小人物についての疑問である（後述）。

次に、西野氏は魏曹植の靈芝篇の一節、

董永遭家貧、父老財無遺。挙仮以供養、傭作致甘肥。責家填門至、不知何用婦。天靈感至徳、神女為秉機

を引用して、それを孝子伝（搜神記）とは「異なつた伝承」（69頁）と捉えられた。即ち、靈芝篇には父の死のことが述べられないから、それは董永と織女との出会いを、父の生前のこととする、物語の異伝であろうと捉えられたのである。そして、その証拠として西野氏の上

げられたのが、図十及び、図十一の董永図に外ならなかつた。まず図十に対する、氏の捉え方を見ておこう。氏は図十を、中央の木（银杏）によつて、右図と左図に分ける。そして、その右図の登場人物は、右から董永と「その仕事を助ける、おそらく天の織女」（69頁）であると述べ、右図は、「二人共農具を手にして相語る」（69頁）場面を表わすものとされる。次いで、左図の登場人物は右から、鹿車に乗る父（下）と織女（上）、車を引く董永と認定し、その織女の動作については、「車の横には右図に見えた女が、華蓋を捧げて父にさせかけている」（70頁）と説明して、その左図は、三人が「仕事を終り」「家に帰る図」（70頁）であるとされた。そして、結論的に両図から成る図十は、「これは董永が父をいたはりつつ農耕にはげむ所へ、女が現れて求婚し（右図）、共に家に帰る（左図）伝承を表すものである」（70頁）と言われたのである。さらに図十に關する、そのような西野説を補強する、例とされたのが図十一であつた。氏は、図十一も図十と同様に右図と左図とに分け、まず左図を、「董永が鹿車をとどめて父をやすませ仕事にかからうとする」（70頁）場面、次いで右図を、「その仕事の場合に天女が降つて求婚する」（70頁）場面とされる。その上で、氏は改めて図十について、「董永の父の生存中に天の織女が天降つてその孝をたすけた事を意味するに違いない」（70頁）ことを確認し、靈芝篇を根拠として、図十（図十一）の基づいたテキストに關し、

元來は靈芝篇に詠まれたように、董永が父に孝養をつくす為に起きた借財の為に困苦してゐたところ、天から織女が降つて機織によつて借財償却を助けたといふ伝説があつた（70、71頁）

と述べて、それを董永物語の元型と認められたのである。さて、例えば劉向孝子伝（図）。また、搜神記等、父の死を挿む、所謂孝子伝のそれは、

その孝行を誇張する為に織女下降の原因として父の歿後葬式の費用に困つて身を奴に売つてその葬式を終へたといふ孝行実施に伴ふ困難さを誇張し補填したものと思はれる（71頁）

として、上記の元型に対し、孝の誇張のために父の死を補填した、言わば二次的な産物に過ぎないと位置付けられたのである。ところが、現在の状況は、

この誇張し補填された伝承と元来の伝承との二つの伝承がある時期には並んで伝はつたが、やがて元の型のものが失はれたものと思ふ（71頁）

として、元型の伝承は、減びて伝わらない状況にあるとされている。以上が図十、図十一をめぐる西野説の概略である。ここで、氏の説を少し批判してみよう。

四

まず西野説において、上記のような図十、図十一の解釈の裏付けとされたテキスト、靈芝篇について言えば、それは、董永の物語を叙述したテキストでは決してなく、虞舜、伯瑜、丁蘭、董永のことを詠んだ詩文に過ぎず、例えば董永に關し、五言の八句を用いてはいるが（丁蘭も同じ。他は四句）、その八句は、虞舜以下と同様、物語の全

てを表わしている訳ではない。従つて、曹植の踏まえた董永物語に、父の死の件りがなかったとは断じられないし、むしろ詩句としての性格上、周知のこととして、そのことには言及しなかつた、と見る方が自然である。だから、靈芝篇を根拠とする西野説は、成り立たないと思われる。では、図十、図十一は、どのように見るべきか。確かに孝子伝図は、その解釈が難しい。特に孝子伝のストーリーに無関係な人物や事物が、当該図像の中に描き込まれている場合、それらの取り扱いには細心の注意が必要とされる。取り分けそれらに付き過ぎることによる、解釈のミスリードに警戒しなければならぬ。例えば陽明本孝子伝によつて、図十を解釈してみると、まずそれは、左右の二図であり得ず、右から一人目の、鋤を両手に握つて上に向け、左へ振り返る人物（右向き）が董永である。そして、画面左、右手で杖を突き、車に坐る人物が父となる。中央の木の役割は、場面を分けるためのものではなく、父に木陰を提供するためである。そして、その他の人物は全て、物語とは無関係で、修飾的に描き加えられたものと思われる。西野説の難点は、図十の右から一人目を董永とすることに加えて、図十左端の車を引く人物も董永とすること、右の董永の頭や服装は、左端の人物のそれらと一致せず、左端の人物を董永と見ることは出来ないのである。図十一をめぐる西野説にも、同じ難点が指摘される。左から二人目を董永とし、三人目も董永とするが、二人目の董永は、頭巾を顎紐で結んで顎髭を生やすが、三人目にはそれらがない。だから、その三人目も董永とは見難く、図十一は詮ずる所、画面に左半に、鹿車に坐る父と、父の方へ振り返る董永を描くものと思われる。

そして、画面右半は、修飾的に加えられたものだろう。さて、図十一右端の女性を織女と見るのであれば、それは物語の後の展開を暗示すべく付加された、一種の異時同図となるであろう。このことから、図十、図十一のいずれにしても、それらの図像から、例えば父の生前に董永の許へ、織女が天降るという内容の、未見のテキストの存在を証明することは出来ないだろう。物語と無関係の、図像の付加的要素に囚われ過ぎると、盥の水と一緒に赤子まで、流してしまうことになりかねないのである。

話は前後するが、図九左上の「まさに天上にかへらんとする天の織女」（69頁）、及び、図九右端の「一小児」（69頁）を指摘して、図九を一種の異時同図と仮定した西野氏は、靈芝篇と図十、図十一から、それらは「董永の父の生存中に天の織女が天降つてその孝をたすけた事を意味するに違いない」（70頁）として、それを物語の元型に措定した上で、「かく見れば、武梁祠画像石〔図九〕について、説話の時間的に前後の関係にある二の場面を一図にまとめて構図したといふ先の仮定は、改めねばならぬ」（70頁）と述べて、図九もまた、失われた元型の物語によるものであらうとされたのである。そして、敦煌本董永変文（S二二〇四）の中に、「天女と董永との間に出来た董仲」（72頁）が登場することを、指摘された西野氏は、「孝子伝に於ては董永の孝行が説話の主要な部分であつたが、変文ではそれと共に、彼に見えなかつた天女と董永との間に出来た董仲が母を求める苦心譚がその最も生彩ある部分をなしている」（72頁）以下、それと田崑崙説話（敦煌本句道興搜神記所収）との関連の検討を通じ、董永変文成立

の背景においても、「矢張り古い伝説が中核となつてゐること」（75頁）を指定して上記、図九右端に描かれた一小児について、

そして若し此の推測が正しいならば先にあげた、武梁祠画像石に見える樹の右に一小児の攀援して上らんと欲するもののあるのは、孝子伝に見えぬもので小児に関する伝承があるのでなからうかといふ先にあげた疑問が解決されて、董永と天女との間に董仲といふ子のあつた伝承を後漢まで引上げ得るのである」（75頁）

と結論されるに至っている。この西野説も大変興味深いもので、先の説と併せ、例えば図九の飛人（左上）、小児（右端）を織女、董仲と捉えることを、可能とする説となつている。そして、もしその西野説を認めるのであれば近時、そのことを後押しするような董永図も出現しているのである。例えば図十二は、(3)泰安大汶口後漢画像石墓の董永図を示したものである。¹⁸ 画面右が趙荀図、左が董永図で（題記が入れ替わり、しかも董永図の題記を丁蘭図のそれと取り違えている）、その董永図を見ると、車の左に子供が描かれている。当図の子供は、聊か抽象的な武梁祠の小児（図九）に較べ、より明確な董仲としてのイメージを持つものである。その点、西野説を強力に裏付ける資料とも思えるが、当図の子供は、本当に董仲なのだろうか。当図は、図九の左右を反転させてはいるが、図九との共通性が非常に高く、例えば画面の上部に、飛人を配することも共通している。ところが、図九の飛人は一人で、それを織女と見ることも可能なのに対し、当図の飛人は三人で、それを織女と見ることは、到底無理であろう。すると、当図の子供に関しても、それを董仲と判断することが難しくなる。そし



図十二 (3)泰安大汶口後漢画像石墓(董永)

て、図十や図十一をめぐる西野説のケースと同様に、当図や図九における登場人物の解釈も、単純に董永とその父以外は、物語に無関係な修飾と捉えるのが穏当かと思われる。というのは、例えば武梁祠の董永図(図九)の織女(左上)と董仲(右端)の考証を支える、西野論文の理論的な組み立てが余り堅固でなく、そこに一定の危うさを感じてしまふからである。その危うさとは、まず織女の認定に、図十、図十一の女性像を援用し、そこへ半ば強引に靈芝篇を引用する形で、言わば凶像にテキストを合わせるかの如く、幻の物語の元型が措定される。そして、仮定的なそれが図十、図十一を通して、武梁祠の織女

(図九)を証明するという、言わば循環論的な手法によって、織女が証明されている訳である。西野説がそこまでであれば、仮説の出来映えによる氏の手法に、何も問題はない。ところが、董仲の認定には、もう一段の仮定が用いられている。即ち、董永変文と、田崑崙説話などの対比を通じた、変文の中核をなす筈の古い伝説の措定である。そして、その措定により、図九の董仲が漸く証明可能となっている。かく考えると、織女と董仲とはそれぞれ別個の仮定が用いられているので、武梁祠の董永図の観点から見ると、織女と董仲の証明には、仮定の上に仮定を重ねる、二重の仮定が要件化されている。上記西野論文における、理論的な組立ての危うさとは、そのことを差したものである。そして、西野説の無理を避けるなら目下の所、例えば陽明本孝子伝の本文を基本に据える、より穏当な考察から研究を進めるしか、方法はないように思われる。

西野氏は、上掲引用の後、さらに董永遇仙伝(清平山堂話本、両窓集上所収)など、中国俗文学における、董永物語流伝の跡を追われた¹⁹⁾が、それは当時最先端の研究水準を示すもので、その価値は現在にあって、なお毫も損なわれることはない。一例を上げよう。図十三は、洪川版御伽草子の二十四孝、董永の挿絵を掲げたものである。当書は、二十四孝テキストの一流、全相二十四孝詩選系のそれを忠実に和訳した体の作品だが、図十三は、董永の妻即ち、織女が雲に乗って昇天する場面を描いたもので、画面左から董永、董仲、雲上の織女(及び、迎えの天女二人)が登場する。驚くべきことに、そこには明らかに董仲が描き込まれているのだが、関連するテキスト本文中には、董仲に



図十三 洪川版二十四孝、董永挿絵

関する言及が全くないのである。西野氏が追究されたテーマには、このような事実が横たわっている。かつて李国棟氏が、董永物語の改編仮定を考察されたことがあり、そこに、

発端―展開―結末

という三つの段階を設けられた⁽²⁰⁾。氏の分析は、西野氏が追尋されたテーマを、さらに深化させる可能性が高く、なお氏による今後の研究の進展に期待したい。さて、氏が現存最古のテキストとして、孝子伝（劉向孝子伝〈図〉、搜神記）を上げられたことは、一面正しい。しかし、劉向孝子伝（図、搜神記）の本文には、例えば「一鋤一廻、顧望父顔色」（陽明本）の一節がなく、武梁祠（図九）以下の董永図を、説明することが出来ない。陽明本孝子伝の本文が、極めて古い事実の一証である。

ここで、翻って考えてみたいのが、図三出現の意義である。前述のように、近時の本図（図三）や図六（22）、図八24など、北魏時代の董永図は、極めてシンプルな図像内容を持ち、また、それを特徴とするが、一方、その特徴は、図四（20）、図五（21）等に見る如く、優に漢代に溯るものである（四川における5（6）7（16）17（18）等も同じ）。中でも、図四（20）は、最古と目し得る董永図であることを思うと、そもそも本来の董永図とは、どのような図像内容を持つものであったのか、その基となった物語テキストと合わせ、論じられて良い時期に、差し掛かっている気がするのである。

〔注〕

- (1) 図版一、図版二は、張宝祥氏提供の原石写真に拠る。
- (2) 図一は、張宝祥氏提供の原石写真に拠る（以下も同じ）。
- (3) 林聖智氏「北朝時代における葬具の図像と機能―石棺床囲屏の墓主肖像と孝子伝図を例として―」『美術史』52・2（154）、平成15（2003）年3月。その林聖智氏の意義と評価については、拙著『孝子伝図の研究』（汲古書院、平成19（2007）年）I・23を参照されたい。
- (4) 陽明本孝子伝の本文は、幼学の会『孝子伝注解』（汲古書院、平成15（2003）年）による。参考までに、船橋本孝子伝の本文を示せば、次の通りである。
- 董永楚人也。性至孝也。少而母没、与父居也。貧窮困苦、僕賃養父。爰永常鹿車載父、着樹木蔭涼之下。一鋤一顧、見父顔色、数進餽饌。少選不緩。時父老命終、無物葬斂。永詣富公家、頓首云、父没無物葬送、我為君作奴婢。得直欲已礼。富公歎与錢十千枚。永獲之齊事。爾乃永行主人家。路逢一女。語永云、吾為君作婦。永云、吾是奴也。何有然也。女云、吾亦知之。而慕然耳。永諾。共詣主人家、主人問云、汝所為何也。女答云、吾踏機、日織十疋之絹。主人云、若填百疋、免汝奴役。一句之内、織填百疋。主人如言、良放免之。於時夫婦出門。婦語夫云、吾是天神女也。感汝至孝、來而助救奴役。天地区異、神人不同。豈久為汝婦。語已不見也。
- (5) (14)（また、(13)、(15)）については、近時の拙訳「大象陶器博物館蔵三彩四孝塔式缶について―唐代の孝子伝図―」（『佛教大学文学部論集』105、令和3（2021）年3月）を参照されたい。
- (6) 図四は、ボストン美術館提供の写真に拠る。
- (7) 檜山満照氏「後漢鏡の図像解釈―中国美術史上における儒教図像の意義」（『アジア遊学』237（實森良彦氏編『銅鏡から読み解く2〜4世紀の東アジア三角縁神獸鏡と関連鏡群の諸問題』所収）、令和元（2019）年8月）
- (8) 当該鏡については、注③前掲拙著のカラー口絵を参照されたい。
- (9) 図五は、二〇一六年八月に私の撮影した原石写真に拠るものだが、原図は極めて細い線刻で表されているため、写真家の立松洋行氏（黎明舎）に依頼して、その図像を見易いものにして貰った。
- (10) 図六は、Gisele Croës, Ritual Object and Early Buddhist Art (New York, 2004), Stone funerary bed C2 に拠る。
- (11) 図七は、呉氏提供の拓本写真に拠り、図八は、同じく呉氏提供の原石写真に拠る。
- (12) ②ヴァージニア美術館蔵北魏石床の董黯図や丁蘭図、また、③呉氏蔵翟門生石床の郭巨図などにおいても、同様の事象が見られることについては、拙稿「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」（『佛教大学文学部論集』101、平成29（2017）年3月）を参照されたい。
- (13) 西野貞治氏「董永伝説について」（『人文研究』6・6、昭和30（1955）年7月）
- (14) 西野貞治氏「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」（『人文研究』7・6、昭和31（1956）年7月）
- (15) 図九は、容庚氏『漢武梁祠画像録』（考古学社専集13、北平燕京大学考古学社、民国25（1936）年）40丁裏、41丁に拠る。
- (16) 図十は、中国美術全集絵画編19石刻線画（上海人民美術出版社、一九八八年）図版六に、図十一は、奥村伊九良氏「孝子石棺の刻画」（『瓜茄』4、昭和12（1937）年5月）図二にそれぞれ拠る。
- (17) 長廣敏雄氏編『漢代画像の研究』（中央公論美術出版、昭和40（1965）年）二部「武梁石室画像の図象学的研究」24董永（80頁）。ここでは、「その左に何か器が地上に在り、右手でその蓋をもっているのは董永で、かれの右上の空中に在るのは織女である」と言い、さらに図十一についても、「二場面をつくり、織女と董永を相対させている」とある（小川環樹氏執筆）。
- (18) 図十二は、『山東石刻芸術選粹』漢画像石故事卷（浙江文芸出版社、一九九六年）三〇に拠る。

(19) 董永遇仙伝については、金田純一郎氏「董永遇仙伝覚書」（『女子大國文』9、昭和33（一九五八）年6月）参照。

(20) 李国棟氏「『董永』の改編過程と母性愛への希求」（『岡村貞雄博士古稀記念中国学論集』所収、白帝社、平成11（一九九九）年）

〔付記〕

本石床の調査、撮影をお許しくださった張宝祥氏、また、同氏を紹介下さった呉強華氏に対し、心から御礼申し上げます。なお小稿は、深圳市金石芸術博物館による北朝文化研究事業の一環である。

（くろだ あきら 日本文学科）

二〇二二年十一月十五日受理



图版一 华夏石刻博物馆藏北魏石床(二面) 正面左板



图版二 華厦石刻博物館藏北魏石床(二面) 左側板